慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランス革命史研究者のために：ブリントン氏の書籍解説から
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.101(465)- 128(492)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス革命史研究者のために

——ブリントン氏の書籍解説から——

間崎万里

はしがき　ハーバード大學教授 W. L. Langer 博士鑑修の下に目下刊行中である The Rise of Modern Europe と題する叢書(全二十册)は、中世の終末から現在に至るまでのヨーロッパ史の政治的、經濟的、文化的方面を概説せんとするものであつて、初學者と大學生にとり絶好の入門書である。既刊の諸册には何れもその卷末に頗る便利な參考書目とその解説が掲載されてゐる。中にも同大學の Crane Brinton 教授の A Decade of Revolution 1789—1799 (N. Y. & London, 1934) は、フランス革命が近世史上の最大事件の一であつて、諸種の方面から近世史研究の樞軸をなすだけあつて、何人にも興味あるべき部門であるが、その卷末の Bibliographical Essay, pp. 291—322 は、特にこの時期に對する初學者入門として最も好適であるので、平素頻發する學生の質問にも應ずべくこゝに譯載することにした。

一　修史概觀

第三共和國の建設は、フランス大革命の起原の研究に新たな刺戟を齎したが、しかしこの研究の最初の成果は、殆んど革命的傳統に資するものではなかつた。實にテーヌの有名な『現代フランスの起原』(後出)は、一八七八年にその第一卷を刊行して以來革命反對論の中樞となつてゐた。テーヌは、その教養も氣質も文學史家であり、思想史家であつたが、彼は獨佛戰爭の不幸を憤つて、これを説明せんがために、或は寧ろその責任を負ふべき誰かを發見することに、主力を注いだのである。彼は明かに悲劇的な現代フ

ランスの起原を、ルイ十六世のフランスに見出したのである。正統共和主義者の何人もテーヌほど舊制度の暗い光景を描いたものはない。その所得の五分の四を租稅と封建的課稅に費やした農民や、その司敎區の收入を世俗の榮華に浪費した不信心な司敎達や、饑餓に瀕した寺區の司祭や、ヴェルサイユの人爲的浮華や寄生的榮達の間に陰謀を同らして所志を遂げんとした大貴族達や、空虛な儀禮の渦卷の中に囚虜となつたお人好しの國王など、舊い言ひ草はすべて本書の中に記されてゐる。かくてテーヌから見れば舊制度は全然不滿足な社會、改革されねばならぬ社會であつた。がしかし革命の道を開いた改革者達は、彼等自からがこの腐敗制度の成果であり、思想的には、少なくともデカルトの頃の間違つた哲學に養成されたのである。テーヌの著作の中心は彼の所謂『古典的精神』なるものを論議するにある。彼の論據は根抵に於てはバークのそれと殆んど同じである。フランスの所謂『哲學者』（即ち當時の啓蒙學者）は政治生活の苦しい現實から正しい道理の雲の國に向つたのである。ラシーヌやその一派の古典的藝術から（しかしテーヌは自然科學には第十九世紀流に滿腔の敬意を拂つてゐたので、ガリレオやニュートンの科學からではない）抽象的なるもの、典型的なるもの、普遍的なるものを追及し、個性的なるもの、具體的なるもの、特殊的なるものを閑却せんとする傾向を受け繼いで、彼等はこの偶然的な世界に於て全く非現實的な『自然の權利』の體系を構成した。舊政治の財政上無能力なることが彼等に機會を提供するや忽ち『哲學者』の門下達は是等の抽象論を具體的な制度の上に實現せんと試みた。その結果は一七八九年乃至一七九二年間の『自然に發生した無政府狀態』であつて、之からたゞ一時的にフランスを救つたものは一七九三―四年のジャコバン黨の獨裁であつた。この獨裁は全く暴力に基礎を置いたもの、別言すれば『哲學者』達の抽象的なユートピヤを全く非ユートピヤ的な方法によつて實現せんとしたものであつたので、これは一層世俗的であるけれども、不當に嚴格不自然なナポレオンの獨裁に讓らねばならなかつた。テーヌの現實の敍述は頗る充實したもので、大に文書を渉獵した結果である。テーヌは地方に進行しつゝあつた事象に大なる注意を拂ひ、斷然『モニター』や同種の公けの資料に依賴することを止めた。オーラールはもちろん、彼が

文書の引證法を誤つてゐると考へ、その誤謬を指摘するために『フランス革命の史家テーヌ』(Taine, historien de la Révolution française)といふ一書を著した。オーラールの批難は大部分どちらかといへば瑣事に拘泥したものであつて、テーヌの著述を顚覆するほどのものではなかつた。精々言ひ得ることは、テーヌがジャコバンの暴行の例證を故意に搜し出してゐたことと、彼がある地方に於て比較的平穩な長い期間の中に一つ兇惡な行爲を發見するや、彼はこの行爲を覺えてゐて長い平穩を忘れて仕舞ふことである。テーヌは彼の時代のフランスについての惡事をよく心得てゐたけれども、之を如何にして矯正すべきかについては知るところがなかつた。恐らく彼の書物の中に具體的な計畫を示さうとしなかつた。英國文學史の史家テーヌはイギリスの實踐的な政治感を非常に賞讚した。『現代フランスの起原』の讀者は、テーヌがフランスの救濟をば、革命的イデオロギーを放棄し、過去を敬ひ哲學者と法律家を嫌へる成功した實務家によつて治むるブルジョア社會を受容するにありと感じてゐたと思ふのである。

オーラールも亦一八七〇年の所產であるが、しかし新共和國に於ける希望に充ちた向上的要素の成果である。オーラールはソルボンヌに於けるフランス革命史最初の講座を擔任し、この有利な地位を利用して學究的(アカデミック)な職業的歷史家の公けの學派を建設し、之が爾來フランスの國家的高等敎育と同一に見られることになつた。彼は、歷史が史料の考證及び使用法につきそれ自からの特殊の技術を有する科學的な學科たることを意識的に確立しつゝあつた當時に於ける時代の產兒であつて、長壽を保てる彼の晚年には彼とその門下が革命の客觀的科學的の歷史を獨占してゐた。第三者からすれば、彼の出發點は科學的眞理に對し公平無私なる尊敬を拂ふと共に、少なくともテーヌに反對して革命を擁護せんとする熱烈な希望に燃えてゐた樣に見える。オーラールはこの主題の研究に宛てられた專門の學術雜誌『フランス革命』(Révolution française)を創立して、一九二七年その死に至るまで同誌編輯の任に當つてゐた。彼は論文及び單行本に仕上げた多量の研究の外、革命の全般に亙る『フランス革命政治史』(Histoire politique de la Révolution française)を著作する餘裕を見出した。オーラールはかなり無趣味なフランス語を書いたが、彼は文章を輕蔑

してゐた。オーラールは彼の持たない文才をば、彼が多分に持てる黨派的熱情よりも、歴史的客觀性に有害であると明かに認めてゐた。彼の著書は明晰であつたが、常に興味を持つて讀むことは困難であつた。本書は表題の示す如く純粋の政治史であつて、『公けの』資料、即ち革命家自身の作つた演説、報告、新聞記事に基礎を置いたものであつた。オーラールは當時の大多數の史家と同樣にメモーア（手記）、特に革命に敵意を抱ける人々、例へばテーヌが大に依賴した知事モリスの如きのメモーアを信じなかつた。オーラールは『歴史の哲學』（これは職業的史家の間に今なほ大に不信用である）を喜ぶ一般思想を否認したが、それでも彼の『政治史』はコシャンの所謂『事態説』（Thesis of circumstances）で恐嚇政治を説明せんとする廣汎な概括を基礎としてゐる。オーラールに從へば、恐嚇政治は國防の政治に過ぎないものであつた。内亂外戰に迫られ、山獄黨に强ひられた獨裁政治であつた。彼は一種のグラフを引かうと試みた。このグラフに於て强烈な恐怖の高點、九月虐殺、一七九三―四年の大恐嚇政治は、正に革命のフランスの敵者にとつての成功の高點、即ち一七九二年のプロシヤの侵入、ヴァンデーの叛亂、デュムリエの叛逆などゝ一致する。しかしオーラールさへも無視することの出來ぬ一つの重大な相異點があつた。フランスにとつての最大の危險は一七九三年十二月までに出會し、一七九四年の春は内外に於ける共和の武器の勝利であつた。しかもギヨチーヌの最大活動は一七九四年の晩春初夏の交であつた。恐嚇政治は勝利に六ケ月後れたのであるが、このことは『事態説』では容易に説明し難いのである。

オーラール門下の秀才アルベール・マチエスは夙に現世紀の初にその師と斷ち、彼自からの雜誌、初には『革命年誌』（Annales révolutionnaires）後ち改題して現在の『フランス革命の歴史的年誌』（Annales historiques de la Révolution française）を創立した。マチエスも亦嚴格な訓練を經た職業的歴史家であつた。彼は主として宗門及び經濟の歴史に於て多量の學問的研究を仕遂げた。しかし世界大戰の直後、彼は簡單な大衆向の革命の記述に筆を染め、一九三二年急死の際には總裁政府の初まで進行してゐた。彼はオーラールの死ぬまで熱烈な論爭を繼續したが、彼とオーラールの筆戰は、表面上ダントンとロベスピエールの人

物論に集注されてゐた。兩者は近代フランスは革命の英雄及びもちろん惡漢を必要としたと感じた。オーラールは粗暴な愛國者で常識の人ダントンをこの英雄とし、その宗教的野心のために革命を犠牲にした、衒學的な、空虛な無駄な理想家ロベスピエールをこの惡漢とした。マチエスは達識ある民主々義者で實際的社會改革家なるロベスピエールを英雄とし、私腹を肥やさんがため何時でも革命を裏切らうとした腐敗せる好色の陰謀家ダントンを惡漢とした。實はダントンとロベスピエールは、その人物よりも遙かに深刻になつた異論の象徴に過ぎなかつた。オーラールは世界を、隨つて革命を、反僧主義の熱烈な愛國的の善良な共和主義的ブルジョアの又經濟學及び倫理學上に於ては舊派の個人主義者の、希望と心情卽ち評價を以て見、革命の中にブルジョア、第三共和國に役立つべき神話を求めたのである。フランシュ・コンテの賤しい農民出のマチエスは世界と革命をば、階級意識的なプロレタリヤの希望と心情を以て眺めたのである。その師と同じに反カトリック的な彼はオーラールの個人主義的な倫理的社會的な原理の十分さを疑ひ、一層空想的な民衆的信仰の必要を感じた。彼はその近代的形態をとれるナショナリズムを信じなかつた。彼は常に黨派的社會主義者たることを否定したけれども、一層粗雜なマルクス主義者直傳の歷史の經濟的解釋を承認し、經濟的放任主義（レセフェール）の酷評家であつた。マチエスは恐嚇政治を外戰內亂の成果であるとするオーラールの說明を受容したけれども、この說明に、一要素を加へて之を全く變化させた。簡單に言へば、この要素は階級鬪爭である。恐嚇政治の獨裁は國防の政府たるのみならず、又プロレタリヤの未熟な獨裁であつた。この獨裁を支持する二要素、ブルジョア愛國心とプロレタリヤ共同責任感（ソリダリテ）の中、前者はなほ產業革命の洗禮を蒙らないフランスに於て無限に强力であつた。一七九四年の勝利と共に、國防政府の必要が止み、一七九四年の春及び初夏に於て、恐嚇政治はロベスピエール、サン・ジュスト及びその一味によつて、全くプロレタリヤ獨裁として使用せられた（風月の諸法令）。私慾なブルジョアの利益は强過ぎて民主的共和政をなさしめなかつた。ロベスピエールの沒落と共にこの最初の不完全な社會主義の經驗は亡びた。後述の如く兎に角マチエスは、恐嚇政治が勝利の後に六ケ月も遲滯したことの說明を與へた。彼は恐

嚇政治の現實の目的を與へた。マチエスの前に社會黨の政治的首領ジャン・ジョーレスによる革命の經濟的解釋があつた。ジョーレスは議會生活の閑散時を利用して、現世紀の初年に『フランス革命の社會史』(Histoire socialiste de la Révolution française) を書いた。この書は社會史にとり新史料に充ち、ロベスピエール派の公定價格とか農業計畫とかいふが如き、特殊問題に新方面を開拓した。本書は整頓した研究ではない。面白い讀み物でもない。ジョーレスの著述の長所はマチエス及びその門下の著作の中に攝取されてゐる。

公けの革命史學派（大部分は大學及びリセーの教授である）はマチエスを奉ずるものとオーラールを奉ずるものとの間に分裂をつゞけてゐる。概言すれば、この分裂はフランスの政黨政治に於ける一方社會急進黨（決して社會黨ではない）と他方社會黨及び共產黨との間の分界線に從つてゐる。各派は專門の雜誌を有し、オーラールの『フランス革命』誌とマチエスの『フランス革命の歷史的年誌』を繼續してゐる。何れも特に地方史の領域に於て絕えず新史料の發表に熱心な研究者を數へる。共和黨兩翼間に於ける接近の痕跡は認め得るやうである。特にロベスピエール派とダントン派間の爭論はなくなりつゝある。若き職業的史家の一部、例へばガストン・マルタン氏やジョルジュ・ルフェーブル氏の如きは、オーラールとマチエスの著作の綜合を我等に供給するであらう（この接近の證據としては、ルフェーブルの『ロベスピエール』に關する項目 [Encyclopaedia of the Social Science, XIII, 413. New York, 1934] を見よ）。

オーラールが公けの共和史學派の開祖であつた如く、テーヌは王黨の、或は少なくとも反革命の史學派ともいふべきものゝ開祖であつた。その最も有力な代表者はオーギュスタン・コシャンであつて、彼が最近の戰爭に早世せることは前途の最も有望な生涯を切り縮めたものである。コシャンは決して革命の完全な歷史を書きはしなかつたが、丁度大戰間際に出版せる彼の簡單な『思想の社會』(Sociétés de pensée) は少なくとも革命の完全な哲學である。コシャンはテーヌの著作を解釋し、彼自身の著作の基礎として彼の所謂『意圖說』(thesis of plot) を修正した。『プロット』といふ語はバリュエル師からネスタ・ウェブスター夫人に至るまでの偏頗な保守的史家に有難がられるメロドラマ的陰謀を暗示するので、不幸な言葉である。テーヌもコシャ

ンも本當は『プラン』即ち『頑固な少數派の社會的意圖』を示す以上に餘り強い意味を持たないのであつた。要するに、コシャンはオーラールの『事態說』に反對して、恐嚇政治は地上天國の實現を企つる『哲學者』の著作に動かされた强壓團體の獨裁であるといふ說明を提起した。ジャコバンは人間行爲の基礎となれる傳統的價値と殊にカトリックの傳統を排除して、『思想の社會』を讀み且つ論議せることから作り出された行爲の模範に從つて人々を行動せしめんことを求めた。人々はかく行動するを欲しないことが明白となるに及んで、彼は彼等をしてかく行動せしめんことを試み之を强要しなければならなくなつた。かくして恐嚇政治は生れた。コシャンの獨自の意見は就中この革命的團體の發生、一七八九年以前の時期にその目的の形成されたこと、それが三部會への選擧を操縱したこと、それが政黨に發達したことを注意して研究したことにある。善良なブルジョア・カトリックであるコシャンは、ジャコバン黨の『小さな町』(petite ville)を歷史的傳統に根を生やせるカトリックのフランスである『大都市』(grande ville)と對照した。彼は『大都市』が一七八九年に幾分秩序を紊してゐたこと、舊制度が發展し行く社會に調和しなかつたことを認めた。けれども彼は革命は根底に於て『小さな町』の『大都市』への勝利、頑固橫着な少數者の組織の貧弱な政治的に無邪氣な多數に對する勝利であること、隨つて恐嚇政治は單なる國防政府ではなく、ギリシヤ流の民衆的『僭主政治』でもなく、ジャコバン黨の近代政治的な徹底的政略に知らず識らず囚へられた感受性の人々に對する狂熱者の規律ある團體の計畫的な必然的暴政であつたと主張した。恐嚇政治は偶發的なものではなく計畫されたものであつた。

コシャンはテーヌよりも舊制度が不利なものでないことを明瞭に認めた。しかし革命反對の史家にとりては、革命は惡であつたのみならず、不必要であつたことを發見すべき次の段階が殘つてゐた。この段階は一九二八年 Pierre Gaxotte 氏によつて最も顯著にとられた。氏の『フランス革命』(Révolution française)は大戰後の不滿なフランスで素晴しい賣行を見た。氏は革命その者については、テーヌとコシャンの『意圖說』を受容して、之に最新流行の歷史的政治的な粉飾を加へてゐる。彼は非常な聰明さを以てマチエスの忍耐强き研究を利用して之を共和黨に仕向けた

のである。この『意圖』は『哲學者』の著作に動かされたのみならずプロレタリヤの共產主義的野心によつて動かされた。善意のブルジョア急進黨は一七九三年にも一九二四年と同樣に『左翼に敵なし』といふ危險なスローガンを受容した。フランスは最高價格や風月の諸法令や旬日（デカヂ）の禮拜などの共產主義的諸經驗に引き入れられた。この經驗はもちろん失敗であつた。今日も同樣の經驗に對して十分な警告であらねばならぬ。彼の革命に關する記事は明晰で活氣あるも餘り獨創的なものではない。彼は明かに研究的史家ではなく大衆作家である。彼の舊制度辯明は一層新しい。舊制度が實は可なり善い社會であつたといふことは、長いこと主黨の明白な信條であつた。この說は近頃ファンク・ブランタノの『舊制度』（Ancien régime）の中に、正しく學問的な姿容を與へられた。Gaxotte はルイ十六世の政府に殆んど無疵な健康票を與へた。第十八世紀のフランスは經濟的に榮えた成金であつた。舊制治下に標準のなかつたことが健全な地方的獨立を保證し、中央集權的な近代制度下に於けるよりも個人を遙かに自由ならしめた。所謂惡弊は更に研究を進むるに於ては、概して革命家が自己辯護のために發明した神話であることが分る。封建的課稅は頗る輕るく、課稅の重壓は戰時負擔の第三共和政治下に於けるよりも確かに重くない。有名な逮捕狀は殆んど全部が上流階級の家憲を强要するための手段として行使されたものである。思想の檢閱は開明政治の異常な出現を確かに妨げはしなかつた。更に舊制度は餘りに呑氣過ぎ、その敵者に對し餘りに寬大であつた。革命は、壓迫された多數が堪へ難い不幸に對する反亂ではなく、狹隘な貪慾な嫉妬的な非キリスト敎的な成上り者の小團體が、人間的なキリスト敎的な又フランス的な階級政治に正しく組織せられた社會に對する悼ましい勝利であつたと。

爾來約百五十年を經過してゐるのに、フランスの史家はまだ大革命の渦中に居る。又この主題の外國の史家はフランスの史家と全く同程度の激情を示すことは稀であるが一層調和的なのではない。イギリスの史家はフランス人の行爲を見て聊か激動を感じたらしく、ドイツの史家はフランス的な事物を研究するときに特に人種的意識が出て來る。實に學問的には歷史は今や國際的基礎の上に置かれてゐる。しかしロシヤ人とアメリカ人は最近他の國人よりもフ

ランス革命に多くの興味を示してゐる樣に思はれる。ロシヤに於てフランス革命は殊に農業史家の興味をそゝつた。彼等が注意を惹いたのは、フランスに於ける農奴制度の崩壞に、解放後のロシヤにとり教訓のあるべきことを思へるためであつた。フランスに於ける農民の所有權、僧侶及び貴族の沒收地賣却の效果に關する吾人の知識はルチスキー、コヴァレフスキー及びカレイエフの著作に負ふ所が多い。フランス革命に於けるアメリカ人の興味は常に大きかつた。たゞしバークマン、プレスコット、モトレー時代の文學的史家は何人もこの主題に興味を引かなかつた。アメリカに於ける學界の職業的史家は全體として、フランスに於ける流行の學派の何れかに與みした。彼等の研究量は就中一八七〇年以後集積せられた莫大な革命の具體的知識の量を膨脹させた。アメリカの史家は豫期せられる如く、教科書の製造に多產であつて、その多くは標準の高いものであつた。又共和のアメリカに養育せられた歷史家は、期待される通り、概して一七八九年の思想に贊意を表し、恐嚇政治中に於ける思想の惡化に著しく驚愕する。王黨派卽ち革命反對派の史學派はアメリカでは殆んど贊成者を有しない。しかるにマチエスはアメリカの青年史家の間に活潑な門下を有し、恐嚇政治の經濟的解釋は今日大西洋のアメリカ側に於て動かし難い斷案となつてゐる。

これが何處に於ても最後の斷案たるべきやは疑はしい。フランス革命のこの簡單な修史概觀からたゞ一つの確實な結論が生れる。事實についての議論の範圍は大に狹ばめられたが、解釋についての議論の範圍は、歷史著述に於ける各新樣式の出づると共に擴がつた。殊に歷史がその姉妹社會科學と益〻密接な關係を加ふるに從ひ擴がつたのである。フランス革命が就中熱心に研究されたのは、西洋社會の根底にその政治的倫理的イデオロギーが存してゐたからである。しかし事件の不可能な轉回でなくとも急激な轉回により、ファシズムや、共產主義や、その他一七七六年と一七八九年の思想を完全になげすてる社會制度が西洋世界に確立したにしても、隨つてフランス革命が活潑な政治的信仰の焦點でなくなつたにしても、なほこの主題の史家の不一致が期待せられる。ローマ帝國は今や十分遠ざかつてゐる。それでもなほ史家はその沒落の理由についての奮問題に異つた回答を與へる。同樣にフランス革命も人間の愛

憎を離れたとき、史家はもうその起原の問題に關心を持たない、或は永久的な『何故か』といふ質問に對して異つた回答を與へないだらうと想像すべき理由はないのである。現在まで彼等の回答は、なほテーヌとオーラールの著述に於て最もよく象徴せられてゐる對立せる二說の中に、非常に廣く配列される。彼等は革命の勃發と經路は、テーヌと共に元來『哲學者』の政治的思想の歸結であつたと說明せんとするか、或はオーラールと共に斯樣な說明を社會的政治的經濟的條件に求めんとするのである。何れの說明も通例他の說明を全く排斥するものではない。確かにその必要はない。それでも論じつめれば結局、テーヌの學派は現實の狀態は實際はさほど惡くはなかつたといふ結論に進み、オーラールの學派は革命主義者のイデオロギーは比較的無價値であつたといふ結論に進むのである。この最後の結論はヴォルテール、ルソー、その他革命の父祖の尊敬に養育された善良なフランス共和派の人にとり、非常に愉快なものではない。例へばルースタン氏やガストン・マルタン氏の著作の中には、革命を『起させた』のは思想ではなく具體的な苦情であつたけれども、思想は革命から受けた我等の最も貴重な遺產となつてつゞく、兎に角革命のエッセンスであるといふ――理論的にはさほどでなくとも感情的には一層愉快な――主張を取上げんとする傾向が認められるのである。

しかもなほロベスピエールよりか數千年前に住んでゐた一アテネ人ほどフランス革命について賢明な記述をなしたものはない。その言ふところによれば『さうして革命は、ヘラスの諸市に幾多の恐ろしき災禍を齎した。かくの如きは是迄ありたるところ、又人間の性質が同一なる限り、將來も常にあるべきところであらう……。諸市に紛爭一度び起れば、之に從ふものは革命の精神をます〳〵推し進め、彼等の企畫の斬新性と彼等の復讐の兇惡性により、既往に發生したる一切の報告を凌駕するに決した。語義は事物に對して最早や同一の關係を有たず彼等の適當と解する儘に變更された。無暴の大膽は眞の勇氣であると思はれ、用心深き躊躇は臆病者の言譯であり、節制は女々しい懦弱の粉飾であつた。すべてを知るは一切を知らぬことであつた。狂氣じみた元氣は人の本性であつた。……亂暴を愛するものは常に信賴を博し、その反對に出づるものは疑惑を以て

見られた。陰謀に成功したものは知識あるものと思はれたが、それにも優る術數の大家は之を發覺したものであつた。他面に於て最初から陰謀と沒交渉を謀れるものは黨の離反者であり、敵を恐れる卑怯者であつた。……』（ツキヂデス、三卷八十二節）歴史上の時は革命の病理學を大に變ずるものでもなく、しかも十分な豫防法を講ずるものでもない。

二　參考書目

この書目解說の主目的はフランス革命史に關する要著の概略を示さんとするにある。舊著はなほこの領域に於ける創造的著作の重要部分を構成してゐると思はれるときにのみ記載した。最近約十年間の著作は一層多く掲載した。その故は容易に手にし得る『ケンブリッヂ近世史』第八卷（一九〇四）及びその他同種の書目的記載に之を見ることが出來ないのと、時間の經過を待たなければ近著の何れの部分が永久的價値を持ち得るかを確め得ないからである。下記の Gershoy 及び Gottschalk の教科書及び C. D. Hazen, The French Revolution (New York, 1932), II, 1025－1045 には一層最近の書目が載つて居り、特に思想史については G. Lefebvre, R. Guyot, et P. Sagnac, La Révolution française (Paris, 1930) の各節の書目的記載が頗る有益である。以上は何れも容易に利用し得るので、本書目は第三節『歐米に於ける革命の傳播』を除き、決して完璧を期したものではないが、國際運動としてのジャコバン主義の研究には一冊の案内書も存しないので、第三節は完全な書目でなくとも兎に角役立ち得る書目たらんことを期した。又第五節が頗る簡單であるのは、狹義に於ける思想史の參考書目は前述のルフェーブル、ギョー、サニャック合著の近刊に便利な記載があり、廣義に於ける思想史のそれは頗る廣汎に亘り一冊の書物を必要とするに至るからである。

一　革命のヨーロッパ

一、一般史

この十年間に於けるヨーロッパよりも寧ろフランスについて書きたい誘惑が強かつたが、協力的の著述のために思ひ止まつた。この場合にも自然重點はフランスの事件に置かねばならぬ。熱知せられてゐる二個の協力的著述は大體この時期に關しこの標準に適つてゐる。それは E. Lavisse et A. Rambaud, Histoire générale : VIII, 1789－1799 (Paris, 1906) と Cambridge Modern History : VIII, The French Revolution (New York, 1904) である。ヨーロッパ的規模の權威ある新著は G. Lefebvre, R. Guyot, et P. Sagnac, Peuple et Civilisation : XIII, La Révolution française (Paris, 1930) である。Propyläen Weltgeschichte : VII, Die französische Revolution, Napoleon und die Restauration (Breslau, 1929) は立派な繪が入つて居り、その A. Stern による革命の記事は着實、正確なるも面白味がない。

二、教科書

教科書の大部分も亦實際は一七八九—一八一五年間のフランス史である。近著の中その規模の最もヨーロッパ的なのはL.R.Gottschalk, The Era of the French Revolution(Boston, 1929)であつて、ナポレオン及びその學派の最近著を顧る巧に摘取してゐる。次の著書二種はフランス外部の事件に割合に多くの注意を拂つてゐる。H. E. Bourne, The Revolutionary Period in Europe(New York, 1914) はホーラールの影響を大に蒙つた優秀な概說であつて、H. M. Stephens, Europe, 1789—1815 (New York, 1893) は解釋としては聊か時代後れなる事實を詰込んでゐる。

三、外交史

H. von Sybel, Geschichte der Revolutionszeit, Rev. ed., 10 vols. (Stuttgart, 1897—1900) English trans. 4 vols. (London, 1867—1879); A. Sorel, L'Europe et la Révolution française, 8 vols.(Paris, 1895—1904)の二大名著は、フランス革命のヨーロッパの國際關係に及ぼせる影響を研究してゐる。兩著何れも大規模な外交史であつて、外交折衝の單なる要目ではない。フォン・シーベルはフランス人に對して激しい偏見を持つてゐるけれども、彼の法律的分析がなければ、ソレルの著は著述することが一層困難であつたらう。ソレル自身は紳士で、フランス人で、第十九世紀末期の敬愛する穩健論者であつた。革命は彼に激動を與へたけれども、彼は全くその大原則を攻擊するまでに至らなかつた。ソレルの著書を修正した多くの學問的研究の中最も顯著なのは R.

Guyot, Le directoire et la paix de l'Europe(Paris, 1911)であつて、Reubell 配下のフランスの外交政策を遺憾に有利なる光明に照らしてゐる。近代の數多き單行本の中注目すべきものは次の諸著である。J. H. Clapham, The Causes of the War of 1792 (London, 1899); G. Michon, "Robespierre et la Guerre," Annales révolutionnaires 1920), XII, 265—311; E. D. Adams, The Influence of Grenville on Pitt's Foreign Policy(Washington, 1904); C. Ballot, Les Négotiations de Lille(Paris, 1910); K. Heidrich, Preussen im Kampfe gegen die französische Revolution (Stuttgart, 1908); P. Gaffarel, Bonaparte et les républiques italiennes, 1796—1799 (Paris, 1895); E. Driault, Napoléon en Italie(Paris, 1906)(著者のナポレオン研究叢書中の一冊)、E. W. Lyon, Louisiana in French Diplomacy, 1759—1804 (Norman, Okla., 1934); D. Gerhard, England und der Aufstieg Russlands (München, 1933). この十年間に於けるヨーロッパの情勢を見事に概括せる良著は A. Wahl, Geschichte des europäischen Staatensystems, 1789—1815 (München, 1912) である。英國の經濟的方法の發達に對しては E. J. Heckscher, The Continental System (Oxford, 1922) の初の給水が有益である。協力的著述なる Cambridge History of British Foreign Policy, 3 vols. の中、第一卷は著人の筆を通じて右世紀を貫る連續的決定に、取扱つてゐる。H. Oncken, Die historische Rheinpolitik der Franzosen (Gotha, 1922) は年代的にはこの著述世紀から遡

かに脱出してゐるけれども、この主題の近代的理解に必須である。外國關係は第四節に掲げた書目中にも取扱はれてゐる。

二　フランスに於ける革命

一、書目的材料及び印行資料

大學卒業程度で著述を希望する研究者にとりて最も能はざる入門書は P. Caron, Manuel pratique pour l'étude de la Révolution française (Paris, 1912) であつて、主要參考書目に對する指針を與へてゐる。重要なる新刊特殊書目は B. F. Hyslop, Répertoire critique des cahiers de doléances pour les Etats généraux de 1789 (Paris, 1932) であつて、現存資料の一切の斷片を採錄し得なかつたことがヒストロップ氏に無用な渉獵に非人間的な忍耐を持ち、全く人間的な訪を持てる不思議な人種といふフランス學者からの嘲笑を與へてゐるが、有益な入門書である。アメリカの大圖書館で容易に利用し得る印行資料は澤山ある。議事錄が見られるのは、Réimpression de l'ancien Moniteur, 31 vols. (Paris, 1843—1845) ; Archives parlementaires, ed. J. Mavidal E. Laurent etc., Series I, 1787—1799, 82 vols. (Paris, 1879—1913)諸種の資料(初めの諸册には認められない)から革命議會の討論を蒐錄せんと企てたもので、現在のところ一七九四年一月で停止してゐる。P. B. Buchez et P. C. Roux, Histoire parlementaire, 40 vols. (Paris, 1834—1838) なほ便利な彙集である。政治機關の作用は A. Aulard, Recueil des actes du comité de salut public, 26 vols.(Paris, 1889—1925) ; A. Debidour, Recueil des actes du directoire exécutif, 4 vols. (Paris, 1910—1917) 一七九七年二月三日に及んでゐる。A. Cochin et C. Charpentier, Les actes du gouvernement révolutionnaire, 22 août 1793 - 27 juillet 1794. (Paris, 1920) ; P. Mantouchet, Le gouvernement révolutionnaire, 10 août 1792—4 brumaire an IV (Paris, 1912) 立派な序文がついてゐる。地方的價値よりも全國的價値を有するパリ・コンミューンは E. S. Lacroix et R. Farge, Actes de la Commune de Paris pendant la Révolution, 2 series, 16 vols. (1894—1914) 未完であつて、一七九二年二月二十四日の巻で停止してゐる。政治の實際の内的作用は A. Aulard, La société des Jacobins, 6 vols. (Paris, 1889—1897) 新聞その他の資料よりジャコバンクラブの遺失した記錄を再錄したもの。地方の諸クラブの記錄は C. Brinton, The Jacobins(New York, 1930) ; A. Challamel, Les clubs contre révolutionaires (Paris, 1895) の中に載つてゐる。經濟史に對しては大部の Collection de documents inédits sur l'histoire économique de la Révolution française があり、既に約一百册を刊行した。之は『カイエ』、災害地の實狀、食糧配給、價格決定、貧民救助等を取扱つてゐる。社會史に對しては新聞紙の外に、W. A. Schmidt, Tableaux de la Révolution française, 3 vols.(Leipzig, 1867—1871) ; P. Caron, Paris pendant la guerre, 2 vols. (Paris, 1910—1914) ; A. Aulard, Paris pendant la réaction thermidorienne et sous le directoire, 5 vols.

(Paris, 1898—1902); L. G. W. Legg, Select documents illustrative of the History of the French Revolution, 2 vols. (Oxford, 1905)がある。研究者は相對立せる二雜誌オーラール創刊の Révolution française とマチエス創刊の Annales historiques de la Révolution françaiseを通じて現代の著作に遡行することが出來る。

二、一　般　史

F. Mignet, Histoire de la Révolution française (Paris, 1824); English trans. (London, 1913) オルレアン派青年學徒の著述、刊行一八二四年、最初の私意なき記述であつて、幾多の點に於て今なほ最上の簡潔なる記述である。L. A. Thiers, Histoire de la Révolution française, 10 vols. (Paris, 1824—1827); English trans. 5 vols. (London, 1895) 長くこの主題に關する『クラシック』となつてゐたが、今では幾分古くなつた。穩和立憲主義の見地をとつてゐる。T. Carlyle, The French Revolution, ed. by C. R. L. Fletsher, 3 vols. (New York, 1912) 說話的著述の傑作たる一大說教であつて、全體に於て、その使用したる資料、主としてメモートの範圍内では驚くばかり正確である。J. Michelet, Histoire de la Révolution française, rev. ed., 9 vols. (Paris, 1883—1887) カーライルにのみ比較せられる。スコットランド人(卽ちカーライル)の說教に對比すべきフランス人の狂樂曲である。ミシレーは彼の神秘な神に人民を生贄としてゐる。鋭情的に書かれ、若干の著しい因きがある。L. Blanc, Histoire de la Révolution française, 12 vols. (Paris, 1847—1862) 最初の社會

史。ロベスピエールの地位を回復し、經濟的原因を力說してゐる。詳細、著實であつて今なほ有益である。H. M. Stephens, History of the French Revolution, 2 vols. (New York, 1886—1891). 一七九三年まで完了せるのみ。自由主義的見地をとれるイギリス人の健全にして地味な良史。H. A. Taine, Les origines de la France contemporaine, rev. ed., 12 vols. (Paris, 1899—1914) (何等考證がなされてゐない。前述の修史概觀を見よ。)(この時期に對し松本信廣氏の邦譯泰西名著歷史叢書第九卷大革命前の佛國あり) A. Aulard, Histoire politique de la Révolution française, origines et développement de la Démocratie et de la République (1789—1804) (Paris, 1901); English trans. 4 vols. (New York, 1910); J. Jaurès, Histoire socialiste de la Révolution française, ed. A. Mathiez, 8 vols. (Paris, 1922—1924)(松本正俊氏の邦譯あり); Lord Acton, Lectures on the French Revolution, new ed. (London, 1925) アクトン卿の學位講義ではあるが、彼の自由主義とカトリック的信仰と社會的信仰の非常な混合物の典型的なるもの。A. Mathiez, La Révolution française, 3 vols. Coll. A. Colin(Paris, 1922—27); English trans. 2 vols. (New York, 1928—31); A. Cochin, Les sociétés de pensée et la démocratie (Paris, 1920); P. Gaxotte, Révolution française; English trans. (New York, 1932); C. D. Hazen, The French Revolution, 2 vols. (New York, 1932)綜述斷片にして不易。國際的學問的成果。マチエスの著述を利用せるも十分に消化されて

ない。次の二著は明白なる偏見により書かれたるも注目に價する。P. Kropotkin, The Great French Revolution, English trans. (London, 1909) (邦譯あり改造文庫に收む) ロシヤ無政府主義者の著述。大革命の事變を說くことの巧妙さ鮮明なることのために大に興味をそゝる書。他書では見られないほど魅惑的な社會經濟史に關する多くの資料を收む。N. Webster, The French Revolution (London, 1919) 大トーリー主義の歷史の極端な例。全革命をば、比較的少數の惡黨共、卽ちオルンアン黨や共濟組合員や『イルミナチ』社員や『哲學者』等の間に重複せる陰謀と解するのである。

三、教科書

英文で最もよく利用されるのは L. Gershoy, The French Revolution and Napoleon (New York, 1933). 近代的研究を十分に攝取し記述明晰である。L. Madelin, La Révolution (Histoire de France racontée à tous) (Paris, 1916) しばゞ教科書として使用せられるけれども、頗る諷諭に富み超文學的でナポレオン黨の偏見に充ちてゐる。概して政治的で眞正直に記述せる良著は E. D. Bradby, The French Revolution (Oxford, 1926) 及び S. Matthews, The French Revolution, rev. ed. (New York, 1923) である。大學卒業程度の人にとつての標準的教本は E. Lavisse, éd., Histoire de France contemporaine : I. La Révolution, 1789—1792, par P. Sagnac : II. La Révolution, 1792—1799, par G. Pariset (Paris, 1921) である。

四、修史史

この主題の修史に關する近代的な最良の完全な記述は、遺憾乍らロシヤ語原本の N. Kareiev, Istoriki Frantsuzkoi Revolitsii (フランス革命史家) 3 vols. (Leningrad, 1924) の中に利用せられるのみである。G. P. Gooch, History and Historians in the Nineteenth Century, 3rd. impression (New York, 1920) はその範圍內では卓越してゐる。P. Janet, Philosophie de la Révolution française, 4e éd. (Paris, 1892) は實際は修史の歷史であるのに、ひどく間違つた書名がついてゐる。最良の著述ではない。

五、特殊研究、主として政治的な、

G. Salvemini, La rivoluzione francese, 1788—1792, 5th. ed. (Florence, 1925) は宣傳から組織的政治行動への推移を取扱つてゐる。A. Cochin, Les sociétés de pensée en Bretagne, 1788—1789, 2 vols. (Paris, 1926). たゞ一州の記事に限られてゐるけれども、前者と同じく思想より行動への推移を研究した頗る重要な寄與であつて、革命に對し明確に敵意を抱ける著者によつて見られたものである。G. Martin, La franc-maçonnerie française et la préparation de la Révolution, 2e éd. (Paris, 1926). 重要な難問題を極めて公平に取扱つてゐる。H. Hinze, Staatseinheit und Föderalismus im alten Frankreich und in der Revolution (Stuttgart, 1928) に於ては、革命の中心問題の一が政治思想並に政治機關の見地から取扱はれてゐる。フォン・ジーベル以降ドイツ人により本問題の修史に加へられた最も重要な寄與である。

G. Lefebvre, La grande peur de 1789 (Paris, 1932)は、この主題の單行本的取扱に對し久しく嘱望せられた欲求を充たしてゐる。S. Herbert, The Fall of Feudalism in France (London, 1921)の中に、八月四日の結果が最もよく研究せられてゐる。オーラールの著書及びサニャックの名著 La légistration civile de la Révolution française (Paris, 1898) の立派な要略である。

王者及び宮廷の個人的任務についての複雑な問題へ寄與せる二個の新著は J. Arnaud-Bouteloup, Le rôle politique de Marie Antoinette (Paris, 1924) 及び J. M. Thompson, "The Fersen Papers and their Editors," English Historical Review (1932), XLVII, 73. である。Marquis de Ferrières, Correspondance inédite, ed. by H. Carré (Paris, 1932) は一七八九年のヴェルサイユの陰謀に對してのみか、革命に於ける普通の地方貴族の顧る生彩ある光景として有益である。C. Du Bus, Stanidas de Clermont-Tonnerre et l'échec de la Révolution monarchique (Paris, 1931) は英國好みの立憲黨の最上の研究である。

L. B. Pfeiffer, The Uprising of June 20, 1792 (Lincoln, Neb., 1913) は十全なる單行本である。A. Mathiez, Le dix août (Paris, 1931) は學究的粉飾はないが、單行本の權威あるもので、マチエスの最もなだらかな著述の一である。F. Braesch, La Commune du dix-août(Paris, 1911)は幾分面白味なき學位論文で、冗漫、不細工でつまらないけれども不可缺の資料集である。一七九二年の最後の騒亂は G. Walter, Les massacres de septembre (Paris,

1932)の中に便利に概括されてゐる。不幸にして脚註はないが非常に公平である。

L. Mortimer-Ternaux, Histoire de la terreur, 8 vols. (Paris, 1863—81)は文書から著作したこの問題の最初の研究として見落すことが出來ない。本書はジャコバン黨に猛烈な憎惡を抱き全く醜い雑を描いてゐる。マチエスは反動の政治的偏見から恐怖政治に近づき、又文書を參照してゐる。W. B. Kerr, The Reign of the Terror (Toronto, 1927) はマチエスの著述の一門下による立派な概括である。その個自身は恐怖政治の（全く『苦鬱的』ではなくとも）現實的な次の研究に於て彼の最も重要な結果の若干をなした。即ち La Conspiration de l'étranger (Paris, 1918); Un procès de corruption sous la terreur; L'affaire de la compagnie des Indes (Paris, 1920); La corruption parlementaire sous la terreur, 2e éd, (Paris, 1927). のみならずマチエスの懷恨し難い努力は手頃な "Bibliografía de A. Mathiez" by R. Caillet-Bois in the Boletín del Instituto de Investigaciones Históricas (Buenos Aires, 1932) 268 に完全に記錄せられてゐる。

恐怖政治の機關に關しては P. Mantouchet, Le Gouvernement révolutionnaire (Paris, 1912) の明晰なる概說は敬くことが出來ない。H. Wallon, Histoire du tribunal révolutionnaire, 6 vols. (Paris, 1880—82) は文書を基礎としたもので、見落も權威上の價値も前述のモルチメ・テルヘーの著作に等閑視してゐる。E. Seligman, La justice en France pendant la Révolution (Paris,

1901)は今なほこの問題を取扱ふる名著である。この領域に於ける最近の重要なる研究は、G. Belloni, Le comité de sûreté générale de la Convention (Paris, 1924) であつて、オーラールの賞讃を受け、マチエスの非難を蒙つてゐる。A. Ording, Le bureau de police du comité de salut public (Oslo, 1930) マチエスの一門下の著。ロベスピエール黨の獨裁的目的を辯明してゐる。C. Richard, Le comité de salut public et le fabrications de guerre (Paris, 1921); P. Robin, Le séquestre des biens ennemis sous la Révolution (Paris, 1929); G. Lenôtre, The Guillotine and its Servants, English trans. (London, 1927)『公けの』史家により大に嫌はれた保守的考古家の著作。ジャコバンクラブの任務に關しては、近著二種あり、一つは L. de Cardenal, La province pendant la Révolution; histoire des clubs jacobins (Paris, 1929) 他は C. Brinton, The Jacobins (New York, 1930) である、恐嚇政治を終はれる偉大な『日』は L. Barthou, Le neuf thermidor (Paris, 1926) に巧に物語られてゐる。

次の五年間に於ける政治的擾亂は、G. Javogues, 'L' affaire du camp de Grenelle" Annales historiques de la Révolution française (1925), II, 23; E. B. Bax, The Last Episode of the French Revolution (London, 1911) (この問題に於ける最上のフランス書を取り入れた、バブーフと彼の陰謀のジョーナリスチックな穩健な研究である) 及び A. Meynier により最近刊行せられた學問的要著 Les coups d'état du Directoire, 3 vols., nouvelle éd. (Paris, 1932) によつて研究せられる。

亡命貴族、ヴァンデー及び同種の運動に關する多くの文獻中ここに擧ぐべきは、初期の著作を概括し參考書目を含める次の諸書のみである。L. Dubreuil, Histoire des insurrections de l'Ouest, 2 vols. (Paris, 1924 25) 學問的で『公けの』學派の一の著述に對し頗る公平なる書 (ヴァンデーに關し最も見事な記述は今なほ故 Pierre de la Gorce のカトリック的な Histoire religieuse de la Révolution の中に見出される)。C. Le Goffic, La Chouannierie (Paris, 1930) は軍事的方面に於て特に良好で、全問題に亘つてゐる。E. Gabory, L'Angleterre et la Vendée, 2 vols. (Paris, 1930—31) 全く健全にして、特に L. Madelin の如き最近の史家の目立つたイギリス最眞の見地よりしてイギリス人に對し氣持よく公平である。E. Vingtrinier, Histoire de la contre-révolution, 2 vols. (Paris, 1924—25). この書は F. Baldensperger, Le mouvement des idées dans l'émigration française, 2 vols. (Paris, 1925) と共に、可なり滿足し得べき亡命貴族の歴史であつて、E. Daudet の著述を凌いでゐる。

一七九九年の狀態に關しては、A. Vandal, L'avenement de Bonaparte (Paris, 1903), I に餘り加ふる所はない。

この時期の憲法史は M. Deslandres, Histoire constitutionnelle de la France de 1789 à 1815, 2 vols. (Paris, 1932) の中に殆んどその表題を裏切るほど廣汎な仕方に於て概括せられ、革命の他の方面と一緒に述べられてゐる。

des Girondins," Annales historiques de la Révolution française (1928), V, 97. である。革命家の宗教的心情は P. Feenstra, De Godsdienst en de Fransche Revolutie(Haarlem, 1929)の中によく示されてゐる。

七、軍事史

これは恐らくフランス革命の歴史の最も不滿足な部分であつて、英雄崇拜、愛國心、滿足及び本來秩序を重んずる軍事思想に充ちてゐる。A. Chuquet, Les guerres de la Révolution, 11 vols. (Paris, 1886—96)は大に賞讃せられたが、その各卷は La première invasion prussienne, Valmy. なこの問題を扱つてゐる。しかし本書は無批判で、略傳上愛國的で、技術的知識に缺けてゐる。少なくとも英文で最もよく利用されるのは R. W. Phipps, The Armies of the First French Republic, 3 vols. (Oxford, 1926—29)であつて、知り作られ引等資料から編集せられ、稍〻保守的で全くイギリス的である。この問題について恐らく最も感受的な著述は二個の明晰なる簡單な論文の中に見出される。即ち S. Wilkinson, The French Army before Napoleon (Oxforc, 1915); The Rise of General Bonaparte (Oxford, 1930). フランスの敵者の側から見た引著は特に目立つてゐる。即ち J. W. Fortescue, History of the British Army, IV, 1789—1801, 2 parts (London, 1906) 及び Krieg gegen die Französische Revolution, 1792—1797, 2 vols. (Vienna, 1905) 之れ十ある多數のオーストリー軍事史家の合著。軍事史の特殊方面に關する最良は G. Michon,

フランスの植民地に於ける革命に對しては、初期の著述を含み J. Saintoyant, La colonisation française pendant la Révolution, 2 vols. (Paris, 1930) の中に掲げられてゐる。徹底的に愛國的なるも良善な著述である。E. Rusch, Die Revolution von St. Domingue (Hamburg, 1930)及び C. L. Lokke, France and the Colonial Question, 1763—1801 (New York, 1932)の單行本も注目に値する。

六、宗教史

その大著は P. de la Gorce, Histoire religieuse de la Révolution française, 5 vols. (Paris, 1909—23)であつて、カトリック教徒の手になれるも、穩健に記され、包藏せる偏見なく、學問的で決してつまらなくない。L. Sciout, Le clergé de France pendant la Révolution. 2 vols. (Paris, 1912—27)もカトリック教徒の著述なるも前者よりも簡明であるが、目ぼしく書かれてゐない。トキエスは青年時代に宗教史家であつたが、その著 La théophilanthropie et le culte décadaire (Paris, 1904) 及び Rome et le clergé français sous la constituante (Paris, 1911) は彼の全著述の長所と短所とを有する。是等は反復主義者によるこの問題への最も有力な答辯である。Aulard, Christianity and the French Revolution, English trans. (London, 1927) はも少し斷乎たる決意を以てすればキリスト教は一七九三年のフランスから根絶したであらうといふ命題を提起したこの巨匠の大なる著を損じの一である。小論文なるも興味あるは G. Rouannet, "La religiosité

La justice militaire sous la Révolution (Paris,1922). 海軍史に關しては A. J. Mahan, Influence of Sea Power upon the French Revolution and Empire, 1793—1812, 10 th. ed. (New York,1898) は最良書である。

八、主として通商及び經濟を取扱ふ特殊研究

嚴密な通商史は殆んどない。 F. L. Nussbaum, Commercial policy in the French Revolution, a Study of the Career of G. J. A. Ducher (Washington, 1923) は多くの點に於て新地を開拓したものである。この方面に於ける最近の研究は次の如くである。G. Lefebvre, "Le commerce extérieure en l'an II," Révolution française (1925), LXXVIII, 133 and following ; E. Pollio, "Le commerce maritime pendant la Révolution," Révolution française (1931), LXXXIV, 289 and following ; C. Poisson, Les fournisseurs aux armées sous la Révolution (Paris, 1932). Annales révolutionnaires 及びその續刊 Annales historiques de la Révolution française 中のトチェスの論文の多くは實業方面を取扱つてゐる。

財政史の初期の著書に取つて代はつたのは長文の重い書物 M. Marion, Histoire financière de la France depuis 1715, 5 vols. (Paris, 1914 –32)であつて、その第三卷及び第四卷がこの時期に該當する。本書は權威的著述であるが、しかし著者が貨幣理論家として得意でないのと紙幣に對し猛烈な利子生活者的偏見を有してゐるのが缺陷である。S. E. Harris, The Assignats (Cambridge, Mass., 1930) の立派な著述は、この時期に對し研究者の深く待る一切である。

經濟史の中生活費、階級鬪爭等に關する部分は多數がトチェスの傑著をなせる La vie chère et le mouvement sociale sous la terreur (Paris, 1927) によつて最もよく代表せられてゐる。主義の史家によつては通例好感を持たれないけれども、本問題に關して興味ある小論文は A. Cochin, "Sur la politique économique du gouvernement révolutionnaire," Revue des questions historiques (1933), CXVIII, 267. G. Pariset, Études d'histoire révolutionnaire (Paris, 1929) は大部分經濟史の貴重な資料より構成せられ、(惜らく未數なきため) フランス經營の佛國民史中の彼の著書では省略されてゐるところのものを用ひてゐる。業績であるがこれに代はるもののない著書は E. Levasseur, Histoire des classes ouvières et de l'industrie en France depuis 1789, 2 vols. (Paris, 1903)である。救貧に關しては全く滿足し得る著述がない。但し L. Lallemand, La Révolution et les pauvres (Paris, 1898) は有益な書物である。

都市のプロレタリヤに關しては、M. G. Jaffe, Le mouvement ouvrier à Paris pendant la Révolution (Paris, 1924) があつて、憲法制定議會治下に於てシャプリエ法 loi le Chapelier を適用することの困難を論じてゐる。A. Mathiez, "La Révolution et les prolétaires," Annales historiques de la Révolution française (1931), VIII, 479 はこの問題に關する彼の最後の斷案である。

J. de la Monneraye, La crise du logement à Paris pendant la Révolution (Paris, 1928); E. Soreau, "Les ouvriers en l'an VII," Annales historiques de la Révolution française (1931), VIII. 117.

農業問題の研究に當れるこの時期の最も有名な史家は、現在ストラスブール大學の G. Lefebvre 氏である。氏の堂々たる學位論文 Les paysans du Nord pendant la Révolution (Lille, 1924) はその價値遙かに地方史を超越し、後來の著作に指針を與へてゐる。氏の近著 Questions agraires au temps de la terreur (Strasbourg, 1932)は主として文書集であるが、有益なる考證的緒言を附し、一層至當なる觀點から有名な風月の諸法令を明かにしてゐる。ルフェーブルの次の二論文は我等の知識の立派な要約である。"Recherches relatives à la vente des biens nationaux," Revue d'histoire moderne (1928), III, 188, 及び "La place de la Révolution dans l'histoire agraire de la France," Annales d'histoire économique et sociale (1929), I, 506. また E. Soreau の信賴し得べき論文 La Révolution française et le proletariat rurale" Annales historiques de la Révolution française (1932), IX, 28 and following. がある。

陸軍問題その他に關しては H. J. Laski, "The Socialist Tradition in the French Revolution," in his volume of Studies in Law and Politics (London, 1932), 及び W. B. Kerr, "Le parti modéré et le conflit des classes à la Convention," Annales historiques de la Révolution française (1932), IX, 412 を見よ。

九、社會史

社會史研究者にとり最も有益な資料集は今なほゴンクール兄弟の著書、E. et J. Goncourt, Histoire de la société française pendant la Révolution; Histoire de la société française pandant le Directoire, 3e éd. (Paris, 1864) である。この種歴史の大部分はもちろん斷片的である。次の諸書は最大の價値を有する如く思はれる。J. Tiersot, Les fêtes et les chants de la Révolution française (Paris, 1908); M. Dommanget, Le symbolisme et le prosélytisme révolutionnaires à Beauvais et dans l'Oise (Beauvais, 1931) 革命の象徴主義の一般知識を適況に使用してゐるので地方史以上に出づる史料である。G. G. Andrews, "Making the Revolutionary Calendar, "American Historical Review (1931), XXXVI, 515 (邦譯、本誌第十二卷三號に掲載); P. Mantouchet, "La vie à Paris sous la Terreur," Revolution française(1930), LXXXIII, 203 et seq.; G. Lefebvre, "Foules révolutionnaires," Annales historique de la Révolution française (1934), XI, 1, 今や時勢後れとなつたルフェーブルの著述を完備すべき興味ある企である。總裁政府の著述と腐敗を記した大業面の二著は L. Madelin, La France du Directoire(Paris, 1933) 及び M. Minnigerode, The Magnificent Comedy (New York, 1931) である。しかし社會史がなければならぬことのもの、即

ち讀者に一時期の外面的事實の想像的な印象を刻み込むべきところのものに對しては、最良の一書アナトール・フランスの忠實な革命物語 Les dieux ont soif (諸版あり) がある。

一〇、傳　記

傳記の數は夥だしくある。こゝには少數のみを選錄する。主として大人物に關係のある諸著は次の如くである。J. Ehrenbourg, La Vie de Gracchus Babeuf (Paris, 1929); E. D. Bradley, Life of Barnave, 2 vols. (Oxford, 1915) 綿密にして判斷公正を得た要著である。E. Ellery, Brissot de Warville (Boston, 1905) は最上の傳記として際立つてゐる。H. Delsaux, Condorcet journaliste (Paris, 1931) は活潑な革命家コンドルセーを取扱つた良著。H. Wendel, Danton(Berlin, 1930) は幾分非常な色彩を加へてゐる。がしかし大概のダントンの傳記作者は修辭に誘はれ勝である。L. Barthou, Danton (Paris, 1932) はこの大政治家を賞讃し、(本書があるだけでも)マチエスの努力が一部徒勞であつたことを確實に證明してゐる。マチエス自からのダントンに關する猛烈な敵意を抱ける著述は廣汎に亙つてゐる、卽ち Danton et la paix (Paris, 1919) 及び Autour de Danton (Paris, 1926) は恐らく見本として役立つであらう。ダントンの最も公平な傳記はなほ H. Belloc, Danton New York, 1899 である。R. Arnaud, La vie turbulente de Camille Desmoulins (Paris, 1928) 恐らく全く苛酷ではないが、J. Claretie, Camille Desmoulins (Paris, 1875) の特殊なフランス感傷主義ほど近代の讀者を憤慨させはしない。G. Girard, Vie de Lazare Hoche (Pris, 1926) も亦他の『小說的な傳記』であつて、敵軍は常に逃亡してゐるが結局それだけである。H. R. Sedgwick, La Fayette (Indianapolis, 1928)。しかしラファイエットの適當な傳記はない。好奇な研究者は D. W. Jackson, Lafayette, a biography. (New York, 1930) を見るべきである。本書は彼を導ひて印行資料の間を通らせるであらう。L. Jacob, J. Le Bon (Paris, 1933); L. R. Gottschalk, Jean Paul Marat (New York, 1927) はフランス革命のこの主題について米人のものした確かに最も興味ある著述の一である。辯明よりも寧ろマラーの說明であるがトーリー的評者から見れば、前者に見えよう。G. Walter, Marat (Paris, 1933); H. Belloc, Marie Antoinette 2 ed. (New York, 1924) 良著。ベロックは彼の政治的社會的の極端から比較的自由に、常にフランス革命の諸題材に全力を盡してゐる。彼の文才は十分に發揮されてゐる。L. de Lamonie 父子の Les Mirabeau 5 vols. (Paris, 1879–91) は古典的に取扱はれる。L. Barthou, Mirabeau Paris, 1914 同輩政治家への讃辭である。D. Walter, Gouverneur Morris, témoin de deux révolutions (Lausanne, 1932) English trans. (New York, 1934) 思想史並に政治史への寄與。E. Hamel, Histoire de Robespierre, 3 vols. (Paris, 1865–67) 熱誠な長文。ロベスピエールのために大に偏見を有して居り餘り正確でないが、それでもなほ唯一の詳細な傳記である。マチエスはロベスピエールの傳記をかき得なんだが、彼の全著はこの人の辯護である。H. Béraud, Mon ami Robespi-

erre (Paris,1927) は往々にして誤謬にその所謂『新』傳記編修法を用ゐ且つその表現が無法であるにも拘らず、好印象を殘すのである。それはマロー氏がロベスピエールを英雄たらしめてゐるフランスの小ブルジョア階級を心から理解してゐるからである。ノイにまた H. Belloc, Robespierre, new ed. (New York, 1927)はこの領域に於ける最良書であつて、ロベスピエールを血に飢えた惡漢とも賢明な政治家ともしないで、寧ろ良れた衒學者にしてゐる。Clémenceau-Jacquement, Vie de Mme. Roland, 2 vols. (Paris, 1929)は相當な出來榮であるが、ローラン夫人への近づき方は夫人自からのメモーアによつてゐる。G Bruun, St. Just (Boston, 1932) 美辭麗句或は排斥の念を全く脱した誠に簡單な賞讃すべき傳記である。J. H. Clapham, The Abbé Sieyès(London, 1912): G. G. Van Deusen, Sieyès : His nationalism(New York, 1932); G. Lacour-Gayet, Talleyrand, 1754—1799 (Paris, 1928) は全くその主題まで達してゐないけれども、利用し得る範に最上の傳記である。L. Lentilhac, Vergniaud (Paris, 1920).

この時期のメモーアは特に有益で興味がある。しかしケンブリッヂ近世史第八卷に掲げてある書目で十分である。

三　歐米に於ける革命の傳播

次の書目は批評よりも使用價値によつた。殊に全體としてこの主題は比較的研究が積まれてゐないからである。故に批評は最少限度に止めてある。ジーベル及びソレルの著述の多くは、次節の

『國民史』の項に掲げた諸著の一部と共に勿論この部分に該當する。

一、接壤諸國

P. Verhaegen, La Belgique sous la domination française, 2 vols. (Brussels, 1923—24)革命の原理に反對してゐる。頗る詳密。S. Tassier, Les démocrates belges de 1789 (Brussels, 1930) ヴォンク黨(Vonckists)の立派な研究である。その續篇である Histoire de la Belgique sous l'occupation française en 1792 et 1793 (Brussels, 1934); F. van Kalken, "Les origines du sentiment anti-révolutionnaire dans les Payes-Bays autrichens en 1789," Revue d'histoire moderne (1927), II, 161; C. Pergameni, "Les fêtes révolutionnaires et l'esprit public bruxellois au début du régime français," Annales de la Société archéologique de Bruxelles (1913), XXVII, 5; T. K. Gorman, America and Belgiun (New York, 1925) は一七八九—一九〇年のベルギー合衆國にアメリカの及ぼせる影響の研究である。

L. Legrand, La Révolution française en Hollande (Paris, 1895); H. T. Colenbrander, De Bataafsche Republiek (Amsterdam, 1908) 奇麗な繪入り本である。

H. Büchi, Vorgeschichte der Helvetischen Revolution, I, 1789—1798 (Solothurn, 1925 ; A. Stern, "Der Klub der schweizer Patrioten in Paris, 1790—1791," Abhandlungen und Aktenstücke zur Geschichte der Schweiz (Aarn, 1926); A. Rufer, J. von Müllers Bericht über seine Mission nach der

Schweiz im Jahre 1797 (Berne, 1933); J. L. Rieser, Les relations franco-helvetiques sous la Convention (Dijon, 1927); A. Rufer, Pestalozzi, die französische Revolution und die Helvetik (Berne, 1929)

K. Bockenheimer, Die Mainzer Klubisten (Mainz, 1896) 地方ジャコバン党に關する單行本。L. Vezin, Die Politik des Mainzer Kurfürsten F. K. von Erthal, 1789—1792 (Dillingen, 1932); P. Sagnac, Le Rhin française pendant le Révolution et l'Empire (Paris, 1917); A. Rambaud, Les française sur le Rhin, 1792—1804, 2e éd. (Paris, 1888).

二、大英國

W. T. Laprade, England and the French Revolution (Baltimore, 1909). ラプラードは彼の公衆の興奮を繼續させるための動機を業勵したという說を主張してゐる。W. P. Hall, British Radicalism, 1791—1797 (London, 1912); P. A. Brown, The French Revolution in England (London, 1918); R. Birley, The English Jacobins (Oxford, 1924) 簡單なる原文による研究に基づく。この問題の最上の短かい研究。J. G. Alger, Englishmen in the French Revolution, 2 vols. (London, 1889), 信用し難い書物であるけれども注意して使用し得る。V. C. Miller, Joel Barlow, revolutionist (Hamburg, 1932) 學位論文。C. Maxwell, The English Traveller in France, 1698—1815 (London, 1932) 良參考書目が載つてゐる。P. W. Pullister, The Irish Rebellion of 1798 (London, 1898); R. Hayes, Ireland and Irishmen in the French Revolution (London, 1932); H. W. Meikle, Scotland and the French Revolution (Glasgow, 1912).

三、ドイツ諸國

W. Wenck, Deutschland vor hundert Jahren, 2 vols. (Leipzig, 1887—1890) 通説であるが、面白く書かれ今以て良き有益である。G. P. Gooch, Germany and the French Revolution (London, 1920) 各國にこの問題を包含した非常に興味ある講義。A. Stern, Der Einfluss der französischen Revolution auf das deutsche Geistesleben (Stuttgart, 1927) 主として文學的方面。J. Dresch, "L' Allemagne et la Révolution française," Vie des peuples (1920), II, 235. 簡單な有益な記事。K. Lessing, Rehberg und die französische Revolution (Freiburg i. B., 1910); H. Ullmann, "Die Anklage des Jacobinismus in Preussen im Jahre 1815," Historische Zeitschrift (1905), XCV, 435; E. Saur, Die französische Revolution von 1789 in zeitgenössischen deutschen Flugschriften und Dichtungen (Weimar, 1913); K. Kersten, Ein europäischer Revolutionär, Georg Forster. (Berlin, 1921); M. Lehmann, "Die preussische Reform von 1808 und die französische Revolution," Preussische Jahrbücher (1908), CXXXII, 211; H. Marczali, "Die Verschwörung Martinovics," Ungarische Revue (1881), I, ii; E. Malyusz, Sándor Lipót föherceg nádor iratai (The writings of the Palatine

Archduke Alexander Leopold) (Budapest, 1926) 大部分ハンガリー語、ドイツ語又はラテン語の文書。ハンガリーに於けるこの時期の西洋語の材料に缺けてゐるので有益である。J. Jaurès, Histoire Socialiste は革命運動のドイツへの影響に關し特に有益である。

四、イタリー

P. Gaffarel, Bonaparte et les républiques italiennes, 1769—1799(Paris, 1895); A. Pingaud, La domination française dans l'Italie du Nord 1796—1805, 2 vols. (Paris, 1914); P. Hazard, La Revolution française et les lettres italiennes (Paris, 1910) 表題が示すほど純文學的ではない。C. Lombroso etc., La vita italiana durante la Rivoluzione francese, 6th. ed. (Milan, 1915); A. Ferrari, L'esplosione rivoluzionaria del Risorgimento italiano, 1789—1815 (Milan, 1925); G. Lombroso, I moti popolari contro i francesi alla fine del secolo XVIII (Florence, 1932); G. Sforza, L'indennità ai giacobini piemontese (Turin, 1909); C. Morandi, Idee e formazioni politiche in Lombardia, 1748—1814 (Pavia, 1927); A. Luzio, Francesi e giacobini a Mantova (Mantua, 1890); L. Rava, La Romagna nel 1798 (Modena, 1933); E. A, Brigidi, Giacobini e realisti o il vita Maria (Siena, 1882); A. Pivano, Albori constitutionali d'Italia (Turin, 1913); F. Masson, Les diplomates de la Révolution : Hugou de Basville à Rome (Paris, 1882); A. Dufourcq, Le régime jacobin en Italie. Étude sur la république romaine (Paris, 1900); B. Croce, La rivoluzione napoletana dal 1799, 4th. ed. rev. (Bari, 1925) 著者の文体を難しと書かれ、後年の著作よりもその哲學に乏しい。A. Simioni, Le origini del risorgimento politico dell' Italia meridionali, 2 vols. (Messina, 1925—29); L. Scandone, "Il giacobinismo in Sicilia," Archivio storico siciliano (1921), XLIII, 279 and following.

五、他のヨーロッパ諸國

A. Tratchevsky, "L'Espagne à l'époque de la Révolution française," Revue historique (1886), XXXI, i; G. de Grandmaison, L'ambassade française en Espagne pendant la Révolution (Paris, 1892); A. Söderhjelm, Sverige och den Franska Revolution, 2 vols. (Stockholm, 1920; Helsingfors, 1924) スウェーデン原文から多數の引用をしてゐる。R. Petiet, Gustave IV Adolphe et la Révolution française (Paris, 1914), 大部分女王史。C. de Larivière, Catherine II et la Révolution française (Paris, 1895).

六、アメリカ

C. D. Hazen, American Opinion of the French Revolution (Baltimore, 1897); D. Malone, The Public Life of Thomas Cooper (New Haven, 1926) 政治の實際組織に及ぼしたるフランスの影響をとく。C. Warren, Jacobin and Junto (Cambridge, Mass., 1931) ヒューイットクラブとの關係を述べ。M. Minnigerode,

Jefferson, Friend of France, The Career of C. C. Genêt (New York, 1928) 參考書目がついてゐる。その結論は全く受容し難いが有益である。G. Chinard, Jefferson et les Idéologues (Baltimore, 1925); B. Faij, L'esprit révolutionnaire en France et aux Etats-Unis à la fin du 18 me siècle (Paris, 1925). 及び彼の The Two Franklins (Boston, 1933) は一七九〇年のアメリカのラディカリズムについてそれが現實に與くてゐるよりも多くの報酬を期待せしめる。J. Rydjord, "The French Revolution and Mexico," Hispanic American Historical Review (1929), IX, 60; L. A. de Herrera, La revolución francesa y Sud-America (Paris, 1910) 全く歴史ではなく政治思想に關する概括の幾分混淆たる蒐集。C. A. Villanueva, Napoléon y la independencia de America (Paris, 1912) 本書の初の數章はフランス革命の時期を取扱つてゐる。W. S. Robertson, Francesco de Miranda and the Revolutionizing of Spanish America (Washington, 1907) (in the Annual Report of the American Historical Association) フランス革命と最も密接な關係を有する南米の人物に關する單行本。十分に參考書目を擧ぐ。C. Parra-Pérez, Miranda et la Révolution française (Paris, 1925) 大部分事實史。

四　國　民　史

一七八九—一七九九年間の十年紀はフランス以外の諸國の歴史に於ては殆んど正確な意味を持たない。それ故、主要各國に於けるこの十年紀の全部或は一部を取扱つた大著を次に止まる。

H. Pirenne, Histoire de la Belgique, 6 vols. (Brussels, 1900—1926) 第五、六卷がこの時期に相當する。既にクラシックとなれる書物である。P. J. Blok, History of the People of the Netherlands, English trans., 5 vols. (New York, 1898—1912) V, 面白味なきも正確にして信頼し得る。H. W. van Loon, Fall of the Dutch Republic, 2nd. ed. (Boston, 1924) and Rise of the Dutch Kingdom (New York, 1915) ハロランの著書より遙かに活潑であり、全體に於いて便全で學問的である。W. Oechsli, History of Switzerland, 1499—1914) (Cambridge, 1922) 確かに英文の最良著。W. E. H. Lecky, History of England in the Eighteenth Century, new ed., 7 vols. (New York, 1892) VI, VII. この革命の時期に對し頗る充實してゐる。ヴィクトリヤ時代の安定と信任を反映せる歴史。W. Hunt and R. L. Poole, The Political History of England, 12 vols. (New York, 1905—1910), X. 標準的、學究的の近代史。J. H. Rose, Life of William Pitt, 2 vols. in I (New York, 1924) 利用し得る最上の、頗る平易、徹底せる、且つ容易に豫想せられるピットに對する愛國的感謝の書。W. L. Mathieson, The Awakening of Scotland, 1747—97 (Glasgow, 1910) 優良。アイルランドに對してはなほ Lecky の書あるのみ。A. E. Richardson, Georgian England, 及び D. Hartley and M. M. Elliott, Life and Work of the People of England. The Eighteenth Century, 2 vols. (London, 1931) 共に

社會史に於て綿密なる記事と繪を使用した實例。J. B. Williams, A. guide to the Printed Materials for English Social and Economic History, 1750—1850 (New York, 1926) 之に於て讀者は本書の範圍を越えて重要な問題を渉及することが出來る。K. Biedermann, Deutschland im XVIII ten Jahrhundert, 4 vols. (Leipzig, 1880) 感情的に自由主義の書。なほ頗る興味に滿ち、なほ文化史の最良書。K. T. von Heigel, Deutsche Geschichte vom Tode Frederichs des Grossen bis zur Auflösung des alten Reichs, 2 vols. (Stuttgart, 1899—1911) この種類史中の眞に最良書の一。近代的、學究的にして、決して卑俗でなく、決して無味乾燥でもない。V. Bibl, Der Zerfall Oesterreichs : Kaiser Franz und sein Erbe (Vienna, 1922) 猛烈に黨派的に墺制度に反對。注意せずには使用し難きも澤山の新資料を收めてゐる。G. S. Ford, Hanover and Prussia, 1795—1803(New York, 1903); F. Meinecke, Das Zeitalter der deutschen Erhebung, 1795—1815, 2nd. ed. (Bielefeld, 1913).彼の他書の高い標準に十分に達してゐる。E. Denis, La Bohème depuis la Montagne Blanche, new ed., 2 vols. (Paris, 1921). 健全にしてよく確立してゐる。R. J. Kener, Bohemia in the Eighteenth Century(New York, 1932)頗る重要な單行本、一七九〇—一七九二年間に集注せられた史料を使用してゐる。その後資料の一部はウィーンに於ける火災のために破壞せられた。E. Sayous, Histoire générale des Hongrois, 2nd. ed. (Paris, 1900) 今なほ西洋語で至當に詳細なる記事。F. Eckart, Short History of the Hungarian People, (London, 1931); R. H. Lord, The Second Partition of Poland (Cambridge, Mass., 1915) 美しい沒個性な單行本。全問題を片付けてゐる。K. Waliszewski, Romance of an Empress (New York, 1894), Story of a Throne, 2 vols. (London, 1895), Paul I of Russia (London, 1913) 詳細なロシヤの傳記的歷史をなしてゐる。なほ政治外交史に對して英語で最もよく利用し得る。V. O. Kliuchevsky, History of Russia, English trans., 5 vols. (New York, 1911—1931), IV, V, 幾分個人的解釋なるもよく考慮されてゐる。經濟及び社會史の研究者に必須。R. N. Bain, Gustavus III and his contemporaries, 2 vols. (London, 1894) 表現に多くの缺陷あるも根本史料を使用してゐる。A. Franchetti, Storia d'Italia dal 1789 al 1799 (Milan, 1907) 可なり詳しく、未だ決して稍〻なし。C, Tivaroni, Storia critica del risorgimento italiano 1735—1870, 9 vols. (Turin, 1888—1897) 第二卷が特殊期を取扱つてゐる。今なほ文化史としての最良書。A. Ballesteros y Beretta, Historia de España y su influencia en la historia universal. 出版中 (Barcelona, 1918—　), 最近出でた第六卷がこの時期を取扱つてゐる。良書。N. Jorga, Geschichte des Osmanischen Reiches, 5 vols.(Gotha, 1908—1913), V; F. Schevill, History of the Balkan peninsula from the earliest times to the present day (New York, 1922) 歷史としてよりは寧ろ概論であるが、その參考書目によりこの複雜時期に關してそれ自體作り

重要でない問題に重点を紹介するであらう。

五　思　想　史

この様な簡単な書誌では『思想史』といふ言葉が占むべき廣汎な領域を蔽ふが如き全がなされないことは明白である。研究者はそが興味あるべき特殊科目の十分なる書誌を參照すべきである。こゝではフランス革命によつて發生したる『意見の眞土』を多少完全に取扱はんとした若干の近著を指摘するに止まる。

一、人　權

Encyclopedia of the Social Science(New York, 1930—　)"Declaration of the Rights of Man and the Citizen,"の項。參考書目がついてゐる。O. Vossler, "Studien zur Erklärung der Menschenrechte," Historische Zeitscrift (1930), CXLII, 516; B. Shickhardt, Die Erklärung der Menschen-und-Bürgerrecht von 1789-1791 in den Debatten der Nationalversammlung (Berlin, 1931).

二、革命の影響

A. Espinas, La philosophie sociale du 18me Siècle et la Révolution (Paris, 1898); G. de Ruggiero, History of European Liberalism, English trans.(Oxford, 1927); G. Elton, The Revolutionary Idea in France, 1789—1871, 2nd. ed.(London, 1931); F. Meinecke, Weltbürgertum und Nationalstaat, 7th. ed.(München, 1928); B. Mirkine-Guetzevitch, L'influence de la Révolution française sur le développement du droit international dans l'Europe orientale (Paris, 1929); J. Maras, Ursprung und Entwicklung des Begriffs der Zivilisation in Frankreich, 1756—1830(Hamburg, 1930); A. Mathiez, "La Révolution française et la théorie de la dictature," Revue historique (1929), CLXI, 304. et seq.; A. Cochin, Les sociétés de pensée et la démocratie (Paris, 1920); A. Favre, Les origines du système métrique (Paris, 1931).

三、政治學說

J. Morley, Edmund Burke, a historical study (London, 1867); A. Cobban, Edmond Burke and the Revolt against the 18th. Century (London, 1929); F. von Oppenheimer, Montaigne, Burke and die französische Revolution, Bacon: Drei Essays (Vienna, 1928); F. J. C. Hearnshaw, ed., The social and political ideas of some representative thinkers of the revolutionary era (London, 1931); P. R. Rohden, Joseph de Maistre als politischer Theoretiker (München, 1929) 參考書に於て『ロヤンチシズム』と『權威主義』の語の意義について若干の有益な考察をなしてゐる。V. Basch, Les doctrines politiques des philosophes classiques de l'Allemagne (Paris, 1927); M. D. Conway, Life of Thomas Paine, 2 vols.(New York, 1892) 頗る主觀的なるも、利用し得る最良書である。

四、ロヤンチシズム

A. Viatte, Les sources occultes du Romanticisme, Illuminisme, Théosophie, 2 vols. (Paris, 1928); A. Monglond, Le préromanticisme français (Grenoble, 1930); I. Babbitt, Rousseau and Romanticism (Boston, 1919) 十分な參考書目がついてゐる。P. Lasserre, Le romanticisme français (Paris, 1907); E. Seillère, Le mal romantique, essai sur l'impérialisme irrationnel (1908) その他特に同一問題についての數種の著述がある。G. Brandes, Main Currents in 19th. Century Literature, 6 vols. (London, 1901—1923), 政治的に自由ロマンチシズムのなほ最も活潑な辯護である。E. Dowden, The French Revolution and English Literature (New York, 1897); C. Cestre, La Révolution et les poètes anglais (Paris, 1906); C. Brinton, Political Ideas of the English Romanticists (Oxford, 1926); C. Schmitt, Politische Romantik, 2nd. ed. (München, 1925). G. A. Borgese, "Romanticism" の項。in Encyclopedia of the Social Sciences, XIII, 426 (New York, 1934). 第一流の參考書目を掲げてある。

五、思想史全般

フランス革命の思想史を書かんとした唯一の試みは Lefebvre, Guyot et Sagnac, La Révolution française (Paris, 1930), "La Révolution française et la civilisation européenne," 465—547. くのサニャック氏の寄稿である。これには立派な參考書目解說、それに第一共和國の科學的、藝術的、教育的努力のよき概說が見出される。しかしサニャック氏の綜合の試みは淺薄にして單純に過ぎる樣に思はれ、『合理主義』と『經驗主義』の對照が彼に幾分比較的臆病な概括の基礎を與へてゐる。その見地は全く大革命の意識的後繼者たる公けの共和學派のそれである。(完)

附記

近刊(一九三六年七月廿日發行)の『西洋史研究』第九輯に「最近フランス革命史研究書目錄」(一二八—一四〇頁)といふ小川氏の手になるルフェーブルの紹介文が載つてゐる。本文と相俟つて研究者に有益であらう。併讀せられんことを。なほその中にはブリントン氏の本書について、この書は『(前略)單にフランスのみに眼を向けずして、革命の影響下に於けるヨーロッパの變形といふことに中心を置いたものであり、就中全體の調和と構想とに於て出色せるものである』(一三六—七頁)と評してゐる。